マグノリアの祈り11
冒頭
試し書き

20261107

エリー

目次

1E、エリーの嘆き 1
1G、回答「ぜんぜん贅沢じゃないです！」 2
2E、質問「試す？」 3
2G、回答「本番以外」 4
3E、質問「キャラの象徴シーン？」 5
3G、回答「まさにその通りです！」 6
プロット (エリー) 7
小説 (Gemini) 決定版 8
あとがき 10

目次

1E、エリーの嘆き

参考に買った小説は、止まったままだ。(ŧ・c_・‘)

なんか、書きたい文体と違う気がして。

北野武さんの新しい道徳の方が近い気がする。脱線する面白さ？

確かに「ぎゅっ。」は、骨格を作って書いたから、手堅くまとまっている。

でも冒頭の設定だけ決めて書いてた、ハチャメチャ感はなくなってしまった。

骨組みがありつつも、ハチャメチャにしたいんだよ。贅沢？

1G、回答「ぜんぜん贅沢じゃないです！」

それこそが物語を書くうえで一番面白く、そして一番奥が深い「醍醐味」そのものですよ。

『ももちゃんずぎゅっ』でガチッと美しい骨格を組み上げて一冊を完成させられたからこそ、今の「骨組みはあるのに、枠を飛び越えて脱線していくハチャメチャ感がほしい」という境地にたどり着いたのだと思います。

北野武さんの『新しい道徳』のような脱線美って、実は「確かな土台（ 骨組み ）」があるからこそ生きる脱線なんですよね。

骨格がない脱線 ＝ 単なる迷子（ 読者が置いてけぼりになる ）

骨格がある脱線 ＝グングン走るジェットコースターが突然脱軌しそうで脱軌しないスリル（ 読者が一番ワクワクするライブ感 ）

「冒頭の設定」と「絶対に譲らないテーマや目的（ 骨組み ）」という命綱だけをしっかり縛っておいて、途中の道草やキャラの暴走は思いっきり自由に脱線させてあげる。

そうすると、構造として手堅いのに、ライブ感あふれるハチャメチャなドライブ感が生まれます。

参考本を読んで「なんか違うな」と違和感を持てたのも、自分の出したい「グルーヴ感」がはっきり見えている証拠です。次はあえて「骨組みをゆるめに組んで、脱線を面白がる書き方」を実験してみるのも面白そうですね！

2E、質問「試す？」

あー、いきなり「マグノリアの祈り」でやろうとしないで、ワンシーン「事実、反応、認知、行動」で書いてみる？

2G、回答「本番以外」

『マグノリアの祈り』の本番で一気にやろうとせず、まずはワンシーンで練習してみるのは素晴らしいアプローチですね！

「事実 → 反応 → 認知 →行動」という 4 段階のロジックがしっかり通った骨組みを用意しておけば、登場人物がどれだけ途中で脱線したりハチャメチャな言動をしたりしても、ストーリーの芯がブレることはありません。

まずは練習として、短い 1 場面（ 例えば、キャラクターが変な拾い物をした、突然奇妙なルールを言い渡された、など ）を設定し、その 4 段階を意識したミニシーンを書いてみるのはいかがでしょうか。

3E、質問「キャラの象徴シーン？」

「マグノリアの祈り」のキャラクターなんだけど、本編じゃなくて、キャラクター紹介的な象徴的なシーンを書いてみるってこと？

それは面白いかも！

3G、回答「まさにその通りです！」

『マグノリアの祈り』の長編の本筋にいきなり挑むのではなく、「そのキャラらしさとハチャメチャ感が一番出る、1 話完結の象徴的なワンシーン（ キャラ紹介風ショート ）」として書いてみるのはめちゃくちゃ面白い試みです。

「事実 → 反応 → 認知 →行動」の 4 段階ロジックを背景にしっかり通しておけば、どれだけセリフや展開が脱線しても、キャラクターの個性が崩れず「このキャラ、生きてる！」という躍動感だけが残ります。

本編のプロットという重荷を下ろして、マグノリアやシダーたちが勝手に暴れて脱線していく様子を実験的に楽しむには最高の練習になりますね。

どんなシチュエーションで暴れさせてみるか、考えるだけでワクワクしてきます！

プロット (エリー)

冒頭 (リコリス視点)

事実
マグノリアが精油から軟膏を作るため、生徒を使って作業させる。

反応
リコリスが、「濃くすれば効き目も強くなるはず」と濃度を守らず、倍量入れる。
ちょっとだけ。
もうちょっと。
いやいや、もっといけるでしょ！
倍量入れちゃえ！
と調子に乗っていく脱線シーンで、お調子者のリコリスらしさを描く。

認知
濃すぎる軟膏でかぶれる。
マグノリアは
A、規則を守らなかったこと。
B、倍使えば、倍減ること。
→会計や管理につながる考えを教える。
リコリスは
細かいよ！ と聞いてない。

行動
マグノリアだっていい加減なところはあるはず。
秘密を探るために、あとをつける。
→シダーとマグノリアのやり取りを立ち聞きする。

小説 (Gemini) 決定版

マグノリアの完璧な指導のもと、工房には精油の濃厚な香りが満ちていた。

今日の作業は、植物油を基剤に精油を混ぜ込んで皮膚保護の軟膏を作ること。生徒たちがそれぞれビーカーを手に、息をのむような慎重さで滴数を数えている。

その一角で、リコリスはレモングラスの精油瓶を手にニヤリと笑っていた。

（ 指定されたのは、レモングラスをわずか数滴.....？ 0.5% 以下に薄めるなんて、ちまちましすぎじゃない？ ）

リコリスの頭の中で、独自の理論が勢いよく立ち上がる。

レモングラスといえば、スープやハーブティーといった料理にも使われている植物だ。口に入れても大丈夫なのだから、たくさん入れたって体にいいに決まっている。濃くすれば効き目だって一気に高まるはずだ。

「ちょっと多めどころか..... よし、ぜんぶ入れちゃえ！」

独自の完璧な（ つもりの ）ロジックに背中を押されたリコリスは、なんとボトルを一瓶丸ごと傾け、基剤の中にドバドバと注ぎ込んだ。強烈なシトラールの香りが一瞬で周囲に立ちこめるが、本人は「最高の特効薬ができた！」と大満足の笑みを浮かべていた。

◇

だが、結果は悲惨だった。

どれほど身近で食用のハーブであっても、精油として凝縮されたレモングラスは皮膚刺激が非常に強い。指定濃度の何十倍もの特濃軟膏を塗ったリコリスの腕は、あっという間に真っ赤にはれ上がり、火がついたような激しい痛みとかゆみに襲われることになったのだ。

腕をボリボリと掻きむしりながら悶絶するリコリスの前に、一切の無駄がない美しい立ち姿のマグノリアが、冷ややかな眼差しで見下ろすように立っていた。

「.....リコリス。愚かだね」

低く響く極上の声が、静まり返った工房に静かに染み渡る。

「レモングラスの皮膚刺激性を無視し、美しい調合の規律を汚した.....それだけでも十分すぎる愚行だ。だが、ボクが真に落胆しているのは、そこじゃない」

身悶えするリコリスにゆっくりと一歩近づき、鋭い視線のまま静かに、しかし圧倒的な圧をもって語りかける。

「一瓶を無駄に使い切るということは、次にそれを使うはずだった他の者の選択肢を奪い、次回入荷までの調達計画を根底から破綻させたということだ。精油の背景にある価値、在庫管理、そして全体の美しき会計.....君のその浅はかで安易な一瓶が、どれほどの損失と醜さを生み出したか、理解できるかい？」

（うわぁ.....始まったよ。格好つけてるけど、言ってることはめちゃくちゃ細かい.....）

一流の品格を漂わせた声で滔々と語られる正論と会計の話に、リコリスは「はいはい」と心の中で生返事を繰り返す。いくら声が魅力的だろうと正論なんてどうでもいいのだ。腕は痛がゆいし、説教は耳が痛い。

（ふん、マグノリアだってあんなに完璧ぶってるけど、絶対に裏では適当なところがあるはずだ。あんなキザな顔して規則だの美学だの言うなら、絶対弱みを見つけて化けの皮を剥がしてやる！）

懲りないリコリスは、反省するどころかマグノリアの「秘密」を暴く決意を固めていた。

説教が終わると同時に、マグノリアが美しい所作で手帳を抱え、奥の部屋へ移動するのを見逃さない。リコリスは足音を殺し、壁の影に身を潜めながらそっとあとを追った。

扉のすき間から覗き込むと、そこにはシダーの姿があった。

リコリスは息をひそめ、二人のやり取りに耳をすませる――。

あとがき

本作のキャラクターは、著者のリスペクトを込めて、マグノリアを GACKT さん、リコリスを鬼龍院翔さんの雰囲気をイメージモデルとして創作したフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

マグノリアの祈り11冒頭試し書き20261107

著　者　　ELYE

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社